

V-1 松山平野の弥生後期土器 -編年試案-

梅木 謙一

1. はじめに

松山平野の弥生式土器編年の研究は、昭和13年小林行雄編『弥生式土器聚成図録』にはじまる。以後、松岡文一『弥生式土器聚成』や、岡本健児氏の『考古学講座』、『日本農耕文化の生成』、『考古学ジャーナル』等の研究がある。いずれも、北四国ないし愛媛県という広域を対象とする編年作業であった。松山平野を対象としたものは、長井数秋氏が『愛媛県史考古・古代 I』「弥生時代編」中にて編年案を提示したほか、十亀幸雄氏による「道後平野北部における弥生時代の地域社会の研究」〔十亀1971〕の研究があげられる。長井氏の編年案（以下、長井編年と記す）は、現在の愛媛県の弥生土器の一つの基準編年として、県内外の報告書・研究に引用されている。長井編年は、県下を三地域に区分した上で、弥生時代を五様式15型式に区分した。編年は、小林行雄の五様式編年を基準におき、各様式の細分に主眼が置かれたものである。だが、編年研究時は、資料の量的不足と良好な出土品（一括遺物等）に恵まれなかつたこともあり、器種構成や形式変化等に不明瞭な部分を多く残した。さて、今回の松山大学構内遺跡 S B 7 出土品や筋違 F 遺跡 S B 5、中村松田遺跡 S B 4 出土の土器群のように近年は良好な資料に恵まれ、特に後期中～後葉は充実し、同時期の土器様相が判明しつつある（P118）。本論は、資料が充実している後期中～後葉を中心に松山平野の後期土器の様相を明らかにするため、一括遺物資料を基礎に器種構成と形式変化に視点をおき、松山平野の弥生後期土器の編年試案を提示するものである（P115、第66図）。

2. 編年

I式（第62図）「く」の字状口縁甕と複合口縁壺の出現と擬凹線文を施すことを特徴とする。この時期は良好な資料に恵まれず器種構成、器形等に不明な点が多い。品種構成は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、支脚形土器があり、器台形土器の存在は不明である。調整は、甕形土器の一部にヘラ削りが見られる。外面調整は、ヘラ磨きが減少し刷毛目調整が主体となる。施文は、擬凹線文が施される。この時期の標準的な資料は、水満田遺跡II区4号土壙〔岡田1980〕があげられ、この他、西野III遺跡第3号住居址〔長井1979〕、天山天王ヶ森遺跡トレンチ出土品、文京遺跡2次調査S B 5がこの時期に比定されよう。

甕形土器 「く」字状口縁で肩部の張りが弱いもの①、⑪、⑬と、肩部が強く張り出すもの②、⑭他がある。前者には、口径が25cmを越える大形品がある。後者は、古い段階のものでは口縁端部を拡張し、擬凹線文を施すものがある。この時期の甕形土器には、上げ底⑯、

⑯他と平底⑬がある。調整は、外面は刷毛目調整で、内面は刷毛目調整ないしヘラ（板状工具）によるケズリが行われる。施文は、口縁端部が拡張されるものには端面に擬凹線文が施される⑯。この他、大形品には肩部に「ノ」の字状のヘラないし板状工具による押圧文が施されるものもある。

壺形土器 短頸壺、広口壺、長頸壺があり複合口縁壺が出現しているものと考えられる。短頸壺は所謂、短頸壺⑯と筒状で短い頸部を持つ太頸壺と呼べるもの⑯がある。広口壺は長頸で大きく開く口縁部をもち、口縁端面に擬凹線文が施される⑯。稀に、口縁端面に山形紋を施すのが見られる。長頸壺は、太頸壺の頸部がやや長くなった形態のものと、細頸壺の形態のもの⑯がある。複合口縁壺は出土例が少ない。文京遺跡 2 次 S B 5 出土品のような、短い拡張部がつくもの⑯がある。

鉢形土器 襲形土器の形態を持つもの⑦と、口縁端部を折り曲げず直口ないし外傾するもの⑯が見られる。また、台付のもの⑯がある。

高环形土器 坝部は、屈接部は稜をなし、口縁部が直立ないしわずかに内傾するものである。口縁部端面と口縁部外面に擬凹線文を施すことが多い⑯。脚部は、脚柱部及び裾部の施文が擬凹線文と細沈線文となる。

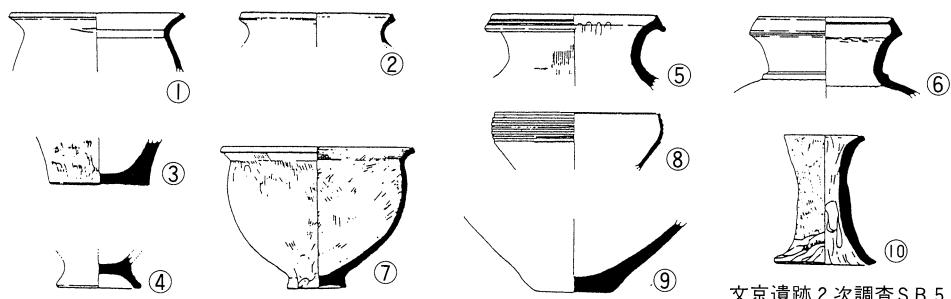
支脚形土器 中空で、左右シンメトリーのもの⑩がある。受部径は底径よりやや小さい。

II式 長頸壺、複合口縁壺、器台、小形鉢が盛行する時期である。器種構成は、襲形土器、壺形土器、鉢形土器、高环形土器、器台形土器、支脚形土器である。調整は、刷毛目調整が主体で、壺形土器、襲形土器に叩き痕が看取される。施文は、複合口縁壺の拡張部・頸部、器台形土器の受部・脚端部、高环形土器の脚部に施される。器形の変化と各器種内の器種構成の変化より細分される。

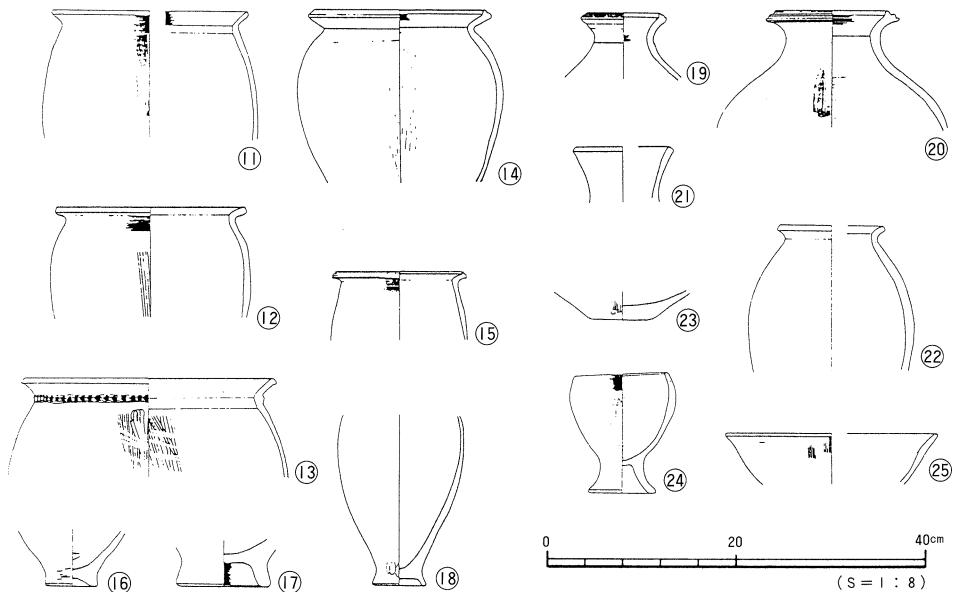
II-1式（第19～34図） 複合口縁が大形壺に採用され、拡張部に山形紋・格子目紋が施される。高环形土器脚部の円孔は一段である。この時期の標準的な資料は、松山大学構内遺跡 S B 7 があげられる（P 117、補遺）。

襲形土器 「く」の字状口縁で肩部の張りが弱いもの23と、肩部の張りが強いもの30がある。前者は大形品と小形品に多く、後者は中形品に多くみうけられる。この時期より、大形品の口径は25cm未満となる。底部の形状は、小形品は依然くびれの上げ底37であるが、中形品・大形品は上げ底か平底である23・30。成形・調整は、刷毛目調整が主体であり板状工具ないしヘラ工具による削りもなされる。なお、この時期のものに叩き痕を看取できるものがある26。

壺形土器 短頸壺、長頸壺、広口壺、複合口縁壺がある。短頸壺は、口縁部が外反するもの91・92と、直立し口縁端面を面取りするもの93・94がある。長頸壺は、頸部がやや伸びるもの70・71、扁平な体部に細く長く伸びる頸部を持つもの81・83・84、内傾し長く伸びる頸



文京遺跡 2 次調査 SB 5



伊予郡砥部町水満田遺跡 II 区 4 号土壤

第62図 松山平野の弥生後期土器 I 式

部にわずかに外反する口縁部をもつもの85がある。広口壺は、大形で筒状の頸部に大きく開く口縁部を持つもの68が知られる。複合口縁壺は、接合部が逆「く」の字状を呈するもの54・57と、タガ状を呈するもの60・63がある。施文は、拡張部には山形紋・斜格子目紋が施され57・60・63、頸部には擬凹線紋・沈線紋が施されるもの60・63がある。

鉢形土器 襲形土器と同様の形態を呈する103と104がある。小形品には、外反口縁のもの113・114と、直立口縁のもの115・118・119がある。この時期より小形品が多くみうけられる。

高壺形土器 中形品と小形品がある。中形品は、壺部の口縁部外反が弱く壺部が深いもの126と、外反が大きく壺部が浅いもの128がある。脚部は、筒状の柱部に外反する裾部を持つものの128と、内傾する柱部にわずかに広がる裾部をもつもの129がある。壺部と脚部の接合には、

充填法137と組み合せ法130がある。後者には、坏部を充填法により作るもの135もある。この他、異形品としてエンタシス状の柱に、口縁部が大きく外反する坏部と有段の裾部がつくるもの147がある。施文は、脚部に円孔が施される128がある。

器台形土器 未だ完形品に恵まれず、全様が不明である。受部は、口縁端部を垂下させる152。端面には擬凹線紋・波状紋・円形浮紋、半截竹管紋が施される150・151他。

支脚形土器 中空のもの154と中実のもの157が知られる。中空のものは、器体が左右シンメトリーで、口径が脚端部径よりやや小さい傾向にある。中実のものは、上・下面にわずかな凹みを持つもの156もある。

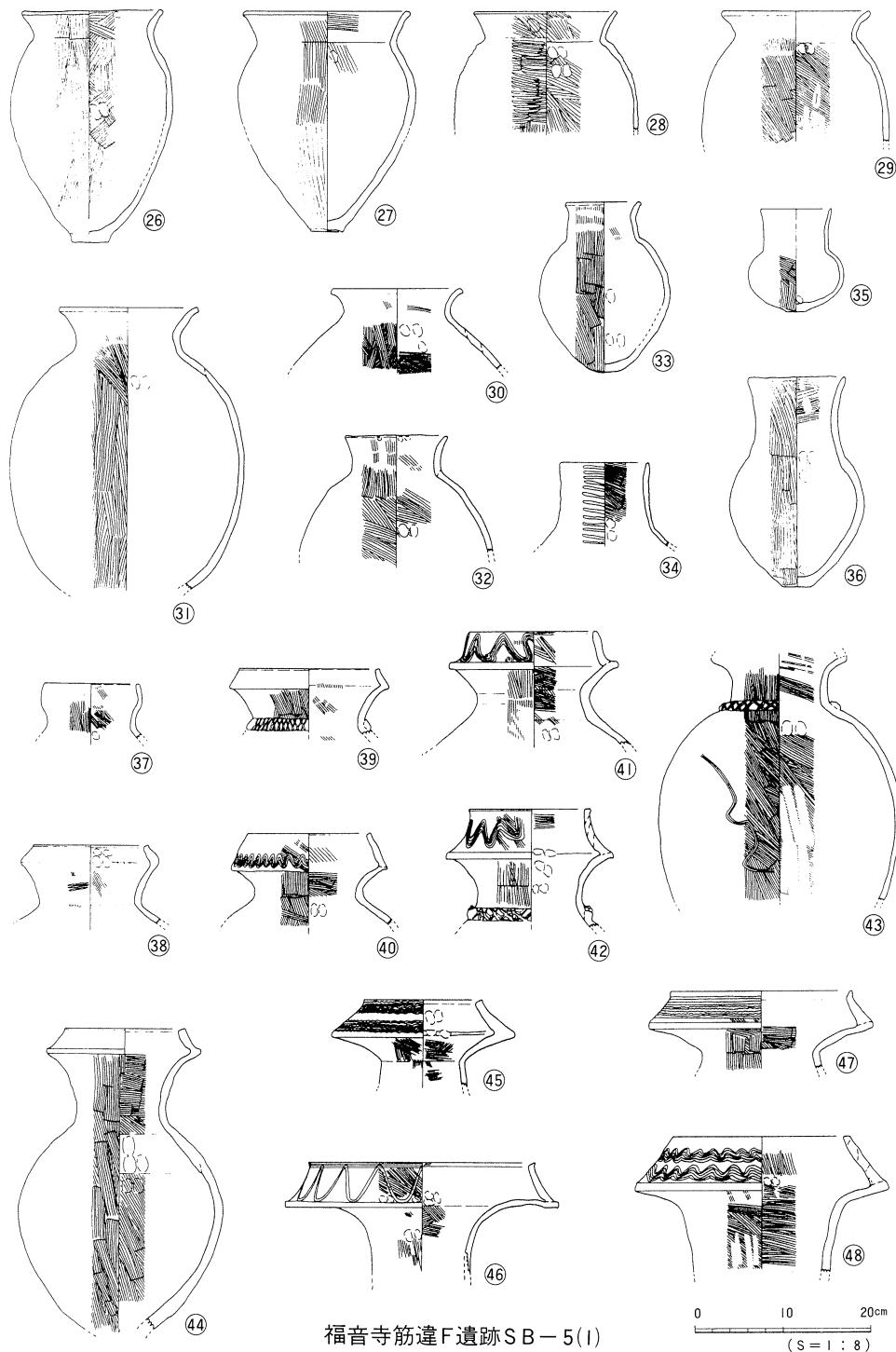
II-2式 (第63・64図) 複合口縁壺と器台形土器の多様化、大形鉢の出現、施文における櫛描波状紋の盛行に特徴づけられる。標準的資料は、福音寺筋違F遺跡SB5 [池田・宮崎 1989]、中村松田遺跡SB4 [島瀬 1989] があげられる。

甕形土器 II-1式の形式を踏襲し肩部が張るもの②、張りの弱いもの⑥がある。器形は、口縁部は長く上方に伸び、胴部は長胴化し、底部は平底化が進んだものとなる。一部に叩き痕が看取されるものがある⑧。

壺形土器 短頸壺、長頸壺、複合口縁壺がある。短頸壺は広口壺と呼べるもの⑩と太頸壺と呼べるもの⑪がある。長頸壺はII-1式の器形を継承するが、口縁部の境が不明瞭となる傾向にある⑬・⑯。小形品は、扁平の体部に直立する頸部、わずかに外反する口縁部をもつもの⑯がある。中形品は、頸部が10cm以下のやや短いもの⑬と10cm以上に長く伸びる⑯がある。複合口縁壺は、中形品にも複合口縁が採用され、壺形土器内における構成比率は高くなる(50%にせまる)。II-1式と同様、複合口縁の形態は多様である。口縁接合部が「く」の字状を呈するもの⑯・⑯、タガ状を呈するもの⑪・⑯、この他、袋状を呈するもの⑯もある。拡張部の形態も内湾するもの⑯・⑯、弓状にそるもの⑯・⑯がある。口縁端面は「コ」の字状を呈する⑯、端部外面が突出するもの⑯・⑯、丸く仕上げられるもの⑯がある。頸部形態も外反するもの⑯・⑯、筒状を呈するもの⑪・⑯がある。以上のように多種多様の形態のものが存在する。施文は、頸部と口縁拡張部に施される。頸部には、凸帯が張り付けられ、凸帶上をヘラないし刷毛目調整工具と同一の工具や板状工具により押圧され斜格子状の文様を施す。なお、この時期の口縁拡張部は無文のものもある。

鉢形土器 底部の平底化が進む。大・中・小形品がある。口径30cm前後、器高30cm前後の大形鉢が出現する⑯。中・小形品は、口縁部が外傾ないし直口するもの⑯・⑯、と外反するもの⑯・⑯、「く」の字状に折り曲げられるもの⑯、頸部が縮りつば状に長い口縁部を持ち底部が突出するもの⑯・⑯がある。直口口縁状の鉢形土器は、口縁端面が「コ」の字状に面取りされ、底部が突出⑯ないし、くびれの上げ底(台付状)のものがある。なお、体部形態は不明であるが台付き(脚付)の鉢形土器がある⑯。台部は低く、大きく開く形状を呈し、

松山平野の弥生後期土器



福音寺筋違F遺跡SB-5(1)

第63図 松山平野の弥生後期土器II-2式(1)

円孔が施される。器壁が薄く、焼成が良好である場合が多い。

高環形土器 坯部の外反が大きくなり脚部は長脚化し⁶¹、大・小の別がある^{59・60・61}。小形品は、長脚化せず円孔を穿たないものもある。大形品は、口縁部が長いもの⁶¹と、短いもの⁶⁰がある。脚部は、内傾する柱部に緩やかに開く裾部をもつもの⁶¹と、筒状の柱部に大きく開く裾部をもつもの⁶³と、少数であるが柱部は薄手で細長い筒状で緩やかに開く裾部をもち、やや大きめの円孔が施されるもの⁶⁴がある。脚部は、円孔以外に施文はなく円孔は二段で多数施されるようになる。この他、II-1式で出現した異形の高環形土器¹⁴⁷が継続して存在し、口縁部と裾部の広がりがさらに大きくなる器形をとる。施文は、裾部と柱部に円孔を穿ち、坯部の口縁端面が拡張され沈線文や浮紋（円形、S字状等）が施され、加飾が著しくなる。

器台形土器 大・中・小形品があり、筒状の柱部に大きく開く受部と裾部を持つ。受部口径が裾部底径をわずかに凌ぐ傾向がある。中・大形品は、受部の端部が拡張される傾向にあり、拡張したものには沈線紋、浮紋（円形、S字状）、波状紋、竹管紋が施されることがあることが多い⁶⁷。大形品は、柱部がエンタシス状を呈することが多い⁶⁷。施文は、受部端面以外に柱部に円孔が多数施される。

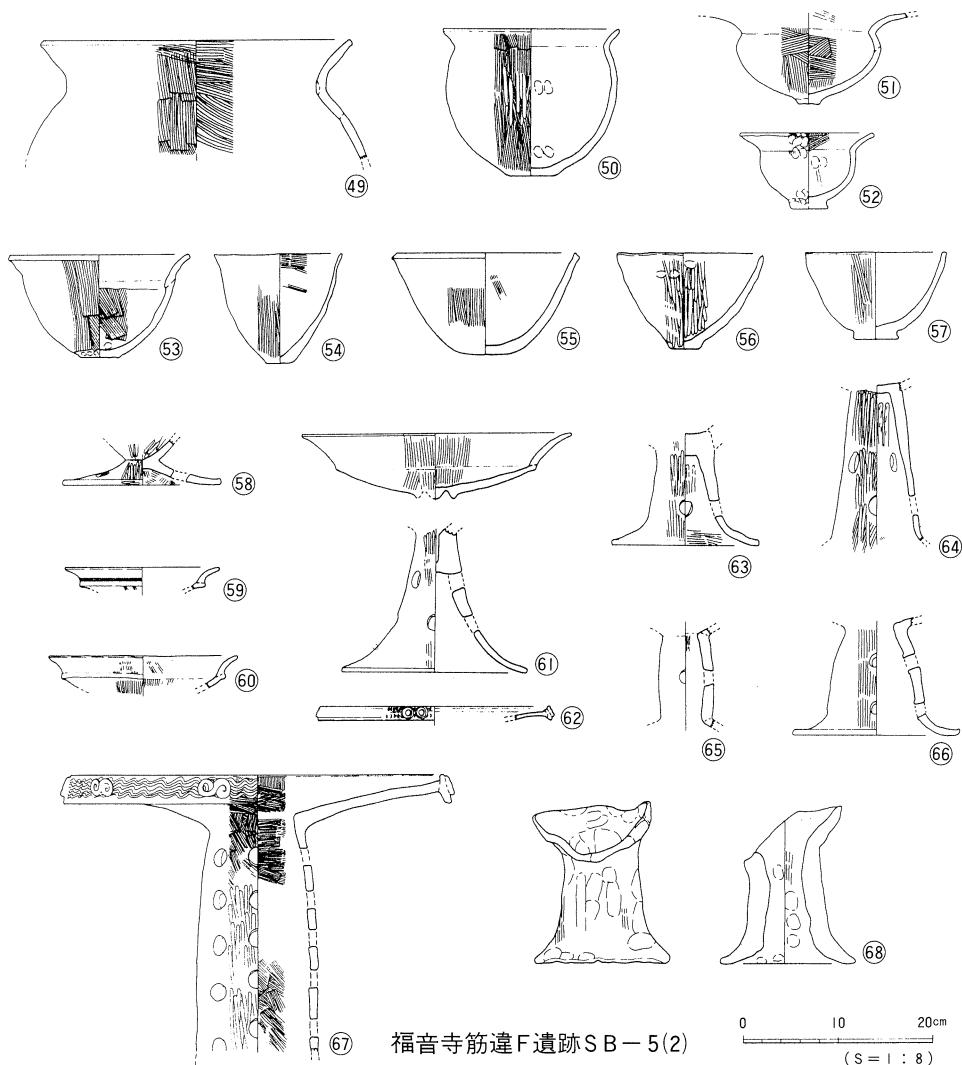
支脚 新しく受部を斜めにカットした形状のものが出現する⁶⁸。

III式（第65図） 各器種とも体部が丸形化し、底部が丸みのある平底へと移行することが特徴である。この時期は良好な資料に恵まれず、器種構成、器形等に不明な点が多い。器種は、甕形土器、壺形土器、鉢形土器、高環形土器、支脚形土器があり、器台は現時点において出土例がみうけられない。この時期の基準的資料は、浮穴小学校3次S D 2（松山市 1988）があり参考資料として道後姫塚13号土壙（坂本 1979）があげられる。

甕形土器 肩部の張りが強いもの^{75・78}と、張りの弱いもの⁶⁹がある。小形品のなかには、口縁部が長く口径が胴部径を凌ぐもの⁷⁴がある。口縁端部は先細りするもの^{71・74}もみうけられる。底部は小さい平底か丸みのある平底がつく⁷⁷。叩き痕を顕著に残すものがあり、叩き痕は胴上半は顕著で、下半は荒く刷毛目調整で消される⁶⁹。内面は、刷毛目調整が主要で、ナデもしくはケズリのものは少ない傾向にある。

壺形土器 長頸壺、広口壺、複合口縁壺がある。長頸壺は、口縁部が外傾ないしゆるやかに外反するものがある^{79・80}。広口壺は、口頸部が大きく開くもの⁸³と筒状の太い頸部に大きく開く口縁部をもつもの⁸⁶がある。口縁端部は、垂下するものがあり端面に波状紋を施すことがある⁸⁷。複合口縁壺は、拡張部が直立化および短くなる傾向を示すものがある⁸⁸。施紋は、頸部と口縁端部に施される。頸部には、凸帶を貼り付けヘラないし刷毛目工具、板状工具で凸帶上部を押圧し斜格子紋が施される。口縁拡張部は波状紋が施される。

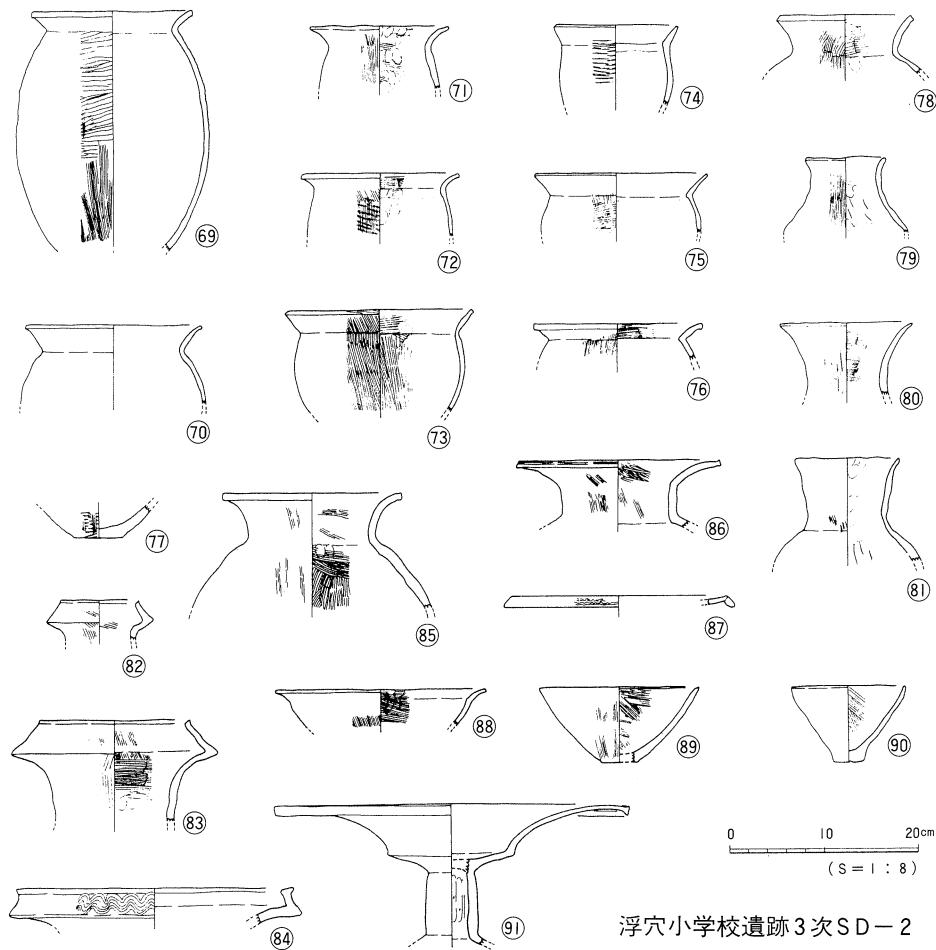
鉢形土器 外傾して立ち上がる口縁部をもつもの⁹⁰と、外反する口縁部のもの⁸⁸がある。



第64図 松山平野の弥生後期土器II-2式(2)

高環形土器 II式の系譜を引くものが散見できるものの、器形の全様が判る資料に恵まれない。ただし、口縁部形態は前式II式の口縁部外反がより大きくなる傾向にあることが想定される⑨1。

支脚形土器 中空のものと中実のものがある。中空のものでは、受部が角状の突起をもつもの⑨2が出現する。支脚は、総じて調整が雑で叩き痕や指頭痕が顕著に残る。

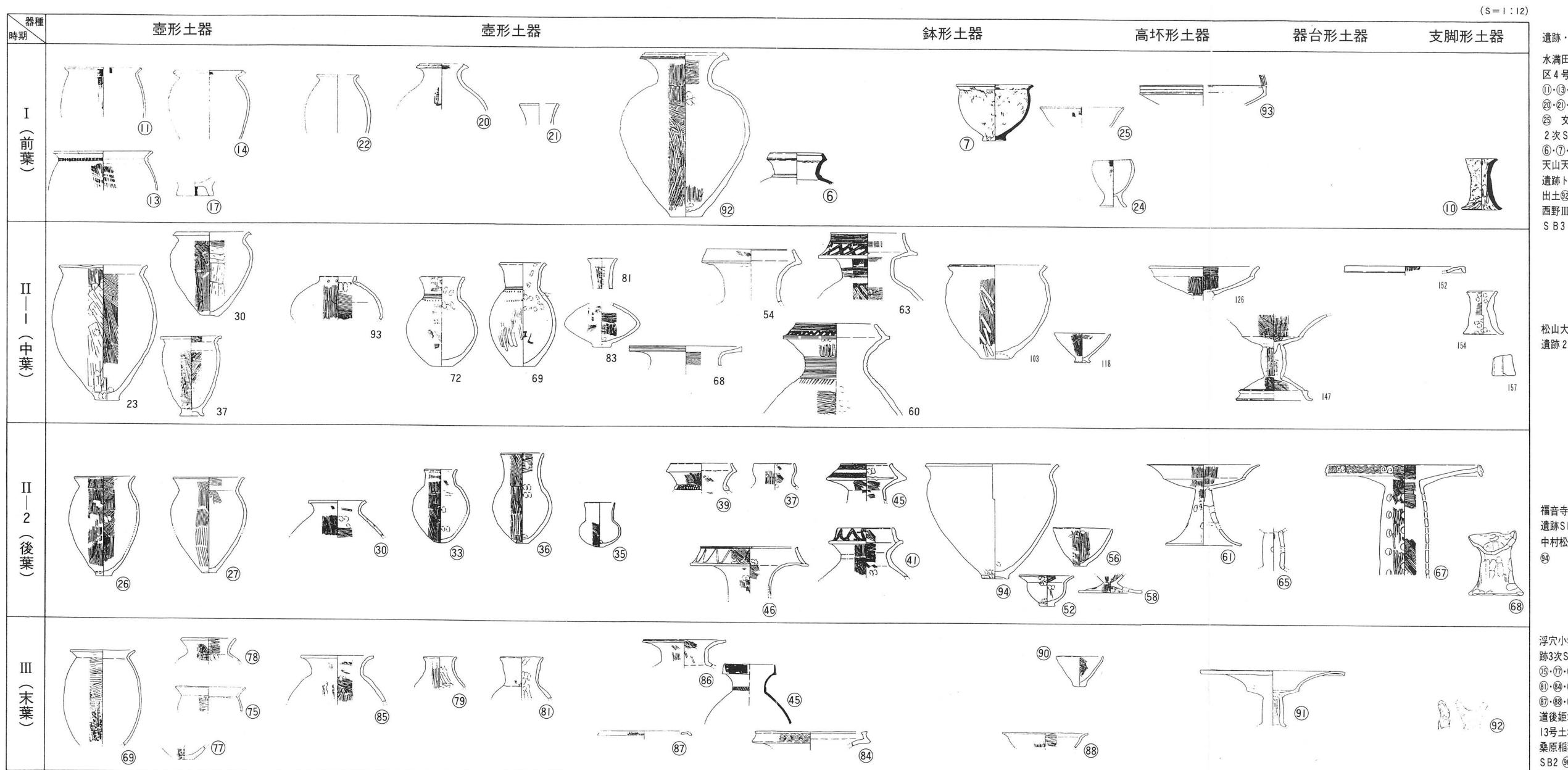


第65図 松山平野の弥生後期土器III式

3. 結び

本論では、器種構成と各器種の形式変化の（大）画期を前～中葉の間と後葉～末の間に求め、後期をI～III式の三様式に区分した。I式は後期前葉に、II-1式は中葉、II-2式が後葉、III式は末に時期比定を考えている。長井編年では、第V様式が後期に比定されている。第V様式は、細分され第1～5型式の五小期が提示されている。本編年試案と長井編年の対応関係を示すと、I式が長井編年第I型式中の天山天王ヶ森遺跡出土品、II-1式が第1型式の天山北遺跡土壙出土品に当たる。天山北遺跡土壙出土品は、高壺形土器の壺部の外反が大きく、細頸長頸壺の頸部の伸びが進行している点等においてII-1式に当たる。II-2式は、第2～3型式に対応する。II-2式に比定した各遺跡の出土品には、各器種において、若干の形態変化が認められるが、本編年試案では、器種構成を主要な基準にしているため、形態変化だけによる細分は本論ではあえて行わなかった。よって長井氏の第2～3型式はII-2

松山平野の弥生後期土器編年(試案)図



第66図 松山平野の弥生後期土器

式に包括されるが、何ら問題のないものと考える。ただし、II—2式の各器種は若干の形態変化があり細分も可能であるが、現時点においては有効な細分類は行えず、また細分類に文化的变化（意義）をみいだせないと考えている。III式は、第5型式に対応するものである。

本試案は、I・III式に一部課題を残したが、松山平野の弥生後期土器の様相は概観できたものと考える。松山平野では、後期前～中葉の間と後～末葉の間に、日常雑器において大きな変化（画期）がある。特に前者の画期は、松山平野の分銅形土製品の消失、日常雑器の一括（一地点）投棄、壺棺墓の多用化の開始時期にほぼ同調する。この画期時には、松山平野において文化的変移・変動があったと考えられないだろうか。なお、本論では松山平野の後期土器を平野内に限って分析しており、搬入品と在地土器との共伴関係や近隣地域との編年の対応関係についてはあえて触れなかった。

松山平野は瀬戸内海沿岸では最大の平野であり、瀬戸内航路の重要地であったことは疑う余地はないだろう。今後は本試案を充実させ、また前後の土器編年や近隣地域との併行関係を明かにし、さらには、弥生時代における松山平野の社会的位置付けを土器を素材として追究していくかなければならないと考えている。

【文 献】

- | | | |
|-------------|------|---|
| 十 亀 幸 雄 | 1971 | 「道後平野北部における弥生時代の地域社会の研究」『愛媛大学歴史学研究月報』第59号 |
| 長 井 数 秋 | 1979 | 「西野III遺跡」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書I』
愛媛県教育委員会 |
| 岡 田 俊 彦 | 1980 | 「水満田遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘報告書I』
愛媛県埋蔵文化財調査センター |
| 松山市史料集編集委員会 | 1980 | 『松山市史料集 第1巻 考古編』 |
| 池田 学・宮崎泰好 | 1989 | 「筋違F遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』 |
| 島 瀬 美 穂 | 1989 | 「中村松田遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報II』 |
| 松山市史料集編集委員会 | 1987 | 『松山市資料集 第2巻 考古2他』 |
| 阪 本 安 光 | 1979 | 『道後姫塚遺跡（史料編）』愛媛県教育委員会 |

〈補 遺〉

松山大学2次調査SB7出土土器の器種構成は以下である。なお、個体認定は、口縁部を対象に行った。資料総数は、166点である。

甕形土器52点(31.3%)、壺形土器48点(28.9%)、鉢形土器22点(13.3%)、高環形土器27点(16.3%)、器台形土器9点(5.4%)、支脚形土器4点(2.4%)、その他4点(2.4%)である。また、壺形土器48点中、複合口縁壺は10点で、壺形土器の20.8%を占める。

考 察

●表27 松山平野における弥生後期土器の主要出土遺構一覧

番号	遺 跡 名	所 在 地	立 地	種 類	遺 構 名	時 期	備 考
1	水満田遺跡	伊予郡砥部町麻生8番地	河岸段丘	集落・墓	II区第4号土壙状	I	文献①
2	愛媛大学文京3次調査	松山市文京町3番地	扇状地	集 落		I	
3	天山・天王ヶ森遺跡	松山市天山町	丘陵地	集 落		I古	文献②
4	愛媛大学文京10次調査	松山市文京町3番地	扇状地	集 落	SX-14円形周溝状	I新～(II古)	
5	松山大学構内2次調査	松山市文京町	扇状地	集 落	SB7	II-1古	
6	西野Ⅲ遺跡	松山市上野町乙12番地	丘陵地	集落・墓	第3号土壙	I	文献③
7	天山北遺跡	松山市天山町294	丘陵地	集 落	柱穴(土壙状)	II-2	文献④
8	福音寺・筋違F遺跡	松山市福音寺426地	沖積地	集 落	SB5	II-2新	文献⑤
9	中村・松田遺跡	松山市中村1丁目65-2	扇状地	集 落	SB4	II-2	文献⑥
10	桑原田中遺跡	松山市桑原町	扇状地	集 落	SK1	II-2	文献⑦
11	土壙原Ⅳ遺跡	松山市上野町土壙原	河岸段丘	集 落	供獻土器群	II-2	文献⑧
12	浮穴小学校3次調査	松山市森松町832番地	沖積地	集 落	SD3	III	文献⑨
13	道後姫塚遺跡	松山市道後姫塚118-2	丘陵地	集 落	第13号土壙	III	文献⑩
14	松山北校1次調査	松山市文京町4番	扇状地	集 落	SB5	III新～(古墳)	文献⑪
15	津田鳥越II遺跡	松山市北斎院町	沖積地	集 落	土器溜り	III新～(古墳)	文献⑫
16	若草町遺跡	松山市若草町	沖積地	集落・墓	SB5	III新～(古墳)	

【文 献】

- ①岡 田 俊 彦 1980 「水満田遺跡」『一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財発掘報告書I』
愛媛県埋蔵文化財調査センター
- ②松 山 市 1980 『松山市史料集 第1巻 考古編』
- ③長井数秋・土居陸子 1979 「西野Ⅲ遺跡」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書I』
愛媛県教育委員会
- ④大山正風・長井数秋 1973 『天山・桜谷古墳発掘調査報告書』松山市教育委員会
- ⑤池田 学・宮崎泰好 1989 『筋違F遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- ⑥島 瀬 美 穂 1989 『中村松田遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- ⑦池田学・松村淳・宮崎泰好 1989 『桑原田中遺跡』『松山市埋蔵文化財調査年報II』松山市教育委員会
- ⑧長 井 数 秋 1977 「愛媛県土壙原北遺跡出土の弥生式土器」『ふたな』創刊号
- ⑨松 山 市 1980 『松山市史料集 考古編』第2巻
- ⑩阪 本 安 光 1979 『道後姫塚遺跡(史料編)』愛媛県教育委員会
- ⑪長井数秋・河野藤吉 1981 『愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書』愛媛県教育委員会
- ⑫森 光 晴 1986 『鳥越遺跡(第1～2次)』『愛媛県史 資料編 考古』